

2020 年

国 語 (B)

( 時間 50 分 )

<解答を記入するときの注意>

1. 試験開始のあいずがあるまで開かないこと。
2. 受験番号は解答用紙の定められたところに記入すること。
3. 解答は解答用紙の定められたところに記入すること。
4. 文字はていねいに書くこと。
5. 答案ができあがっても終了のあいずがあるまで着席し、指示にしたがって提出すること。

高 輪 中 学 校

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数に制限がある場合は、句読点や記号も字数に含まれるものとします。

関西の小さな出版社に勤めている「マナミ」は幼いころから、出来のよい姉に対し強いコンプレックスを感じていた。マナミは小説家「神山聖子」かみやませいこの担当であったが、聖子の妹で、自分同様に姉に対し強いコンプレックスを抱えている「里枝」と、すっかり意気投合し、いつのまにか聖子を棄殺する依頼を引き受けてしまった。ところが、その実行日の早朝、「阪神淡路大震災」が起き、交通網のマヒする中、とりあえず、マナミは聖子の家へたどり着いた。聖子は無事であり、二人で冷蔵庫にあるもので食事をとっていると、聖子は突然「空豆」そらまめが食べたいと言出す。

「ねえねえ、知ってる？」

と言った。

「空豆ってさ、黒いスジがあるじゃない。あれって、なぜだか知ってる？」

料理をしないマナミは、そう言われてもびんとこなかったが、きれいな緑色にくっきりと黒い線があったような気がする。

「空豆と炭とワラが旅に出るのよ。でね、川があって、ワラがじゃあボクが橋になるよって、体張るわけ。で、まず炭がワラの上を歩いてゆくんだけど、川の流れが急で怖くなっちゃうのね。で、真っ赤になって火を出すの。するとワラも燃えちゃって二人とも川に落ちちゃうのね。それを見ていた空豆が笑うんだけど、あまり笑い過ぎてお腹が破れちゃうのよ。で、しくしく泣いていたら、旅人が通りかかって、針と糸で縫ぬってやるの。でも黒色の糸しかなかったから、今でも空豆は黒いスジがついてるんだよね」

マナミも、先生の話聞いてるうちに、そんな話があったことを思い出した。

「空豆って、ひどいヤツですね。人の不幸をそんなに笑うなんて」

「でも、わかる気がしない？」

と神山先生はマナミの顔を見た。

「人の不幸って、<sup>1</sup>なんか安心するじゃない」

そう言って、暗い街を見下ろした。

「でも、こんなにたくさんの人が死ぬのは、耐えがたい。私、痛い。痛くてしょうがない。どこもケガしてないのに、ものすごく痛い」

そう言って、神山先生は手で顔を覆った。先生は声をたてずに泣いているようだった。駅前の写真店に飾ってあった、堂々とした着物姿の先生ではなかった。肉を噛み切っていた挑戦的な先生でもなかった。ただ無防備に泣いている神山先生を見て、マナミは鞆かばんの中をさがした。何をさがしているのか、自分でもわからなかった。何かせずにはいられなかった。<sup>2</sup>長年、先生の編集担当をしていた癖くせかもしれないなかった。ここは私が何とかせねばと、わけもなく思う。鞆かばんの中の手が小さな袋にあたり、引っぱりだすと携帯用の裁縫セットだった。

「先生、針と糸を持ってました」

マナミがそう叫ぶと、神山先生は顔を上げた。泣き顔のままなので、うんと歳を取ったように見える。

「先生、これで大丈夫です。これで綴とじてしましましょう」

神山先生は、マナミの顔と裁縫セットをかわるがわる見て、

「何を？」

と聞いた。

「<sup>3</sup>傷口をです」

そう答えると、なぜかマナミの方が泣けてきた。<sup>4</sup>自分にもまた、大きな傷口があるのを思い出したからだ。それはあまりにも長く放置してきたので深く、骨まで達していた。癒える時間なんてなかった。傷の上をさらに傷つけられる。その繰り返しだった。できれば、姉に死んで欲しかった。そうでなければ、自分は生きてゆけない。姉が生きているかぎり、私は惨めなまじなままだとマナミは思った。その惨めさを、人に見せまいと生きてきた自分が、あまりにもかわいそうだった。

「そうだね」

と神山先生が言った。<sup>5</sup>人の傷口を縫うのが私たちの仕事だったね、そう言ってマナミが差し出した裁縫セットを手に

取った。そして、<sup>6</sup>これ記念にもらつていい、とマナミに聞いた。マナミは鼻が詰まって返事ができなかったので、そのかわりに何度もうなずいた。

近所の家の庭の少し下の暗い部分に、<sup>7</sup>小さな明かりが灯った。発電機か何かを持ち込んで作業していたのだろう。明かりと一緒に、おおつという人の喜びの声がちらまで上がってくる。

その声に、マナミの胸にも喜びがこみ上げてくる。それは先生も同じだったようで、泣いていたはずなのに、笑顔でマナミの方を振り返った。

マナミと神山先生は、家に入って眠れる場所をつくった。押入れが開く状態だったので、<sup>8</sup>布団は簡単に取り出せた。「引き戸じゃなかったらアウトだったね」

と先生は笑う。

寢床に入っても、二人はなかなか眠れなかった。マナミは思いきって自分の話をした。母のこと、姉のこと、そしてブラウスのポケットの中の薬のこと。それで先生を殺しにきたこと。それを誰に頼まれたかは話すことはできなかったが、黙って聞いていた先生にはわかっているようだった。自分の殺害計画を聞いても、先生は表情を変えることはなく、「かわいそうに」とつぶやいた。「あなたのことじゃないわよ」とあわててつけくわえる。

「そんなこと、人にたくさねばならなかった人がね、かわいそうだなと思う」

「ケーサツに言いますか？」

とマナミが聞くと、

「言うわけないじゃない。自分の身内なんだから」

と言った。(8)、先生は自分の妹が頼んだということを知っていた。

「あなたも身内みたいなものだし」

そうか、その身内に裏切られたのだ、と思うと、マナミは先生が不憫に思えてきた。先生の顔をのぞくと、先生は掛け布団をすっぽりとかぶっていた。

「大丈夫、私は傷ついてないからね」

<sup>9</sup>と先生は布団の中から、くぐもった声でそう言った。

「人が惨めなやつだと思っても、私がそう思わないかぎり傷つかない。傷つくのは、自分自身が惨めだと思ったときだけ」

先生はそこまで言っただけで首を出し、「そーなのよ」と何かを発見した人のように、生き生きとした声を出した。

「自分を傷つけられるのは、自分だけよ」

先生は、はっきりと自分に言い聞かせるようにそう言った。

「空豆の話、もう少ししていい？」

マナミの返事を待ちきれず、話し始める。

「別の人が聞いた話によると、炭とワラと空豆が旅をしている途中、食べ物がなくなってしまったんだって。で、炭とワラは空豆を食べようとしたらしいのよ。まっ、未遂みすいだったんだだけどね」

「そんな話もあるんですか？」

「うん。もしかしたらさ、空豆は自分のことを惨めだっと思ってたんじゃないかな。だから人の不幸を、お腹が破れるくらい笑ったんだよ」

「空豆って、すぐわれないやつですね」

まるで自分のようだと、マナミは思う。

「惨めになるってことは、<sup>10</sup>そういうことなんじゃないかな」

先生は低い声でそう言っただけで、突然高い声になって、

「でも、旅人にすくってもらったんだよ。破れたところを縫ってもらったってことは、もう一度、やり直せってことなのよ。そう思わない？」

そうかもしれないけれど、とマナミは思う。しかし、自分には、やり直す資格などないような気がする。つい何時間か前までは、先生を本気で殺そうと思っていたのだから。

「私たちはさ、旅人だよ」

<sup>11</sup>「え、空豆じゃないんですか？」

「そっっちゃなくて、いつも針と糸を持ち歩いて、破れたところを見つけたら、とにかく縫うの。それが私たちの仕事」<sup>12</sup>  
先生は、私の仕事とは言わず、私たちの仕事と言った。

「私にそんな資格はありません」

「なに言ってるの、街も人も、こんなになっちゃったんだよ。資格とか、そんなこと言ってる場合じゃないでしょう」

マナミは、今日歩いてきた風景を思い出す。そして、まだ見ていない風景を想像する。こんなにおびただしい傷を縫うことなんてできるのだろうか。でも、ここにいる人たちはやるのだろうか。たぶん、生きるということは、そんなことの繰り返しなのだ。

「とにかく縫う」

先生はもう一度そう言って、眠りに落ちていった。

《木皿泉『カゲロボ』より》

問 一 —— 1 「なんか安心する」とありますが、その理由を自分で考えて答えなさい。

問 二 —— 2 「長年、先生の編集担当をしていた癖」とはどのようなことですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、実際に自身で何もできない先生にあきれつつ、つつい手をかしてしまいたくなること。

イ、外面は自信满满々でも内心は臆病な先生を教え導き、何とか体裁を整えてあげようとする事。

ウ、力強そうに見えても意外にもろい一面を見せる先生に、できるだけの支援をしようとする事。

エ、大胆な行動の中に繊細な心理を隠し持っている先生を、誰よりも理解し優しく見守り続ける事。

問 三 —— 3 「傷口をです」・4 「自分にもまた、大きな傷口がある」とありますが、先生・マナミの「傷」とはどのようなものですか。本文に即してそれぞれ二五字以内で説明しなさい。

問 四

——5 「人の傷口を縫うのが私たちの仕事だったね」・6 「これ記念にもらっていない」とありますが、文中の先生の言葉の中で、この二カ所だけはカギ括弧かっこがついていません。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、マナミがちょうど今考えていたことを、先生がはっきりと言い当ててくれたから。
- イ、つらい経験を話した時に、先生がかけてくれた言葉を心の中で繰り返し返していたから。
- ウ、先生のかけた優しい言葉が、自分自身の悲しい思いに沈むマナミの心の中に届いたから。
- エ、泣きながら自分の過去に思いをはせるマナミが、うわの空で先生の言葉を聞いていたから。

問 五

——7 「小さな明かりが灯った」とありますが、「小さな明かり」が表すものの説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、悲惨な災害から復興を目指す人々の不屈の精神の表れであり、文筆という手段を捨てて共に復興のために尽力しようと誓うちか先生とマナミを強く後押しする明かりである。
- イ、悲惨な災害の中で芽生えた人々の希望であり、再び人々の「傷口を縫う」という使命感を取り戻した先生と、それを支えるマナミに勇気を与えてくれるかのような明かりである。
- ウ、悲惨な災害の中で亡くなった多くの人々を悼むいた鎮魂ちんこんの心であり、今後は亡くなった人々を悼む作品を作る覚悟を決めた先生とそれを支えるマナミにそれが天命であることを伝える明かりである。
- エ、悲惨な災害の中で絶望視されている人々の生存の可能性にわずかながらも期待を抱かせるものであり、致命的な「傷口」のある先生とマナミにも今後を生き抜いていく希望を抱かせるような明かりである。

問 六 ( 8 ) に入れるのにふさわしい言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、やっぱり      イ、もちろん      ウ、意外にも      エ、どちらにせよ

問 七 — 9 「先生は布団の中から、くぐもった声でそう言った」とありますが、その時の先生の状況としてふさわし

いものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、絶対に自分自身が惨めであることを認めまいとする強い意志を、独り静かに確認している。  
イ、不憫そうに自分を見るマナミの姿を見ると惨めな気持ちになるので、わざと無視している。  
ウ、正直に告白したうえで自分を心配するマナミへの感謝を、あえて見せないようにしている。  
エ、強がりと言っても身内に裏切られたことはショックで、その真情を覚さとられまいとしている。

問 八 — 10 「そういうこと」が指し示す内容としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、自分は周りのものに裏切られて不幸になったから、他人も自分と同じように不幸になってしまえばいいと思うこと。  
イ、自分は周りのものに裏切られてどうにもできないから、他人の不幸を大笑いすることで自分の不幸を紛らわ

そうとすること。

ウ、自分は周りのものに裏切られたから、その腹いせとして他人を不幸にすることで腹がちぎれるくらいに笑ってばかりにすること。

エ、自分は周りのものに裏切られたが何も仕返しできないから、せめて他人の不幸を冷笑することで自分が他人より上に立っていると思うこと。



問九 — 11 「え、空豆じゃないんですか？」とありますが、マナミは自分自身をどのような存在だと思っ  
ていますか。

三〇字以内で説明しなさい。

問一〇 — 12 「先生は、私の仕事とは言わず、私たちの仕事と言った」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、マナミはその言動で先生の心の傷を癒やしてくれており、執筆活動のよきパートナーであるから。

イ、マナミや先生のような不幸をよく知っている人間こそが、他人の不幸を救うことができるはずだから。

ウ、マナミのように本来助けてもらおう側の人間も、この非常時においては人助けに尽力しなければいけないから。

エ、マナミや先生を含め人それぞれの事情はどうあれ、人はみなお互いに助け合うことで生きていくものだから。